

11. 少年柔道の指導に関する一考察

茨城大学 尾形 敬史
富士リハビリテーション専門学校 風間 美佳

11. A Study on the coaching Judo for elementary school student

Takashi Ogata (Ibaraki University)
Mika Kazama (Fuji College of Rehabilitation)

Abstract

This thesis is a study of elementary school students who practice Judo, the age they have the opportunity to start Judo, their training conditions, awareness of their training.

The results are summarised below ; The starting age students studied Judo is 8, 9, 10 years old. In general they practiced Judo 2 or 3 times per week. In general the training sessions are from 1.5-2.5 hours. In general they take part in competitions from once a month to once every two months. The students' most enjoyable moments of their Judo trainings are when they overcome opponents and win fight. On the other hand they don't enjoy losing.

1. はじめに

1882(明治15)年、嘉納治五郎によって創始された柔道は、1964(昭和39)年にはオリンピック種目に採用され世界中に普及発展している。2004(平成16)年に開催されたアテネオリンピックでは、出場した日本選手14人中10人が金・銀のメダルを獲得する活躍を示した。オリンピック選手の多くは、幼・少年期から柔道を始めており、中学、高校、大学などの部活動を経て実業団、警察などで活動している。中学校の前段階における柔道は、町道場やスポーツ少年団などで行われており、少年柔道は競技柔道の底辺を支えている。

茨城県では、2000(平成12)年シドニー五輪男子81kg級の瀧本誠選手、アテネ五輪男子100kg超級の鈴木桂治選手、同女子78kg超級の塚田真希選手と2大会連続で金メダリストを輩出するなど少年柔道から活躍する選手が多い。塚田選手のみが中学校から柔道を始めている。ま

た、少子化の中でも、小学生の競技者数は特に減少することなく推移している。

少年犯罪の多発や家庭における教育力の低下などが心配される現在、少年柔道のあり方は子供の健全育成の面から注目されている。一方で、同県では国際選手を輩出している反面、選手が中学や高校への進学時に県外へ流出してしまう問題や、競技志向への極端な偏りなどが懸念されている。

これまでの少年柔道に関する指導者を対象にした研究^{1,2)}では、指導内容や、安全面・衛生面における施設の不備、形の指導がなされていないことなどが指摘されている。しかし、子供たちを対象とした研究はみられない。そこで本研究では、少年柔道に取り組んでいる子供たちに対し、練習の実施状況や環境及びそれに対する意識や、柔道に対する意識や興味関心、目標等を調査し、茨城県における少年柔道の実態を把握するとともに、今後の少年柔道の指導に役立つ資料を得ることを目的とする。なお、アンケート調査への回答能力を考慮し、小学5、6年生を対象とするとともに、小学生のときから柔道を継続している中学1、2年生も対象とした。

2. 研究方法と対象

1) 対象

茨城県内の柔道クラブ、柔道スポーツ少年団等に在籍する小学校5年生及び6年生の男女、中学校に在籍する1年生及び2年生の部員の中で、小学生期から継続して柔道を行っている男女を対象とした。有効回答は合計290名、内訳は次のとおりである。

小学5年生（男子56名、女子21名）、6年生（男子79名、女子29名）、計185名。

中学1年生（男子39名、女子24名）、2年生（男子30名、女子12名）、計105名。

2) 研究方法

(1) 調査方法：調査は、無記名で自記式の調査紙を用い、小学生は、2004年11月から12月にかけて各団体の代表者に郵送し、返信用封筒にて回収した。中学生は、同年11月11、12日に開催された新人大会において各柔道部顧問に質問用紙を配布し回収した。

(2) 質問内容：質問紙は多肢選択法と自由記述を用い、以下の41項目の質問を作成した。

①個人のプロフィール：学年、性別、柔道開始年齢、動機。

②練習の実施状況や環境：1週間あたりの練習日数、1日あたりの練習時間、休憩時間の有無、水分補給の可否、練習場の面積、指導者の人数・年齢・性別、合同練習・合宿の有無及び実施状況、トレーニング実施状況、試合への参加状況。

③柔道以外の習い事の実施状況：運動の習い事・運動以外の習い事の有無及び実施状況

④自身の意識：練習の実施状況、練習環境、試合への参加状況に対する意識、柔道に対する意識・興味関心・目標。

なお、補助調査として各少年柔道団体の責任者に対して、使用している道場の広さ（畳の枚数）と一週間あたりの練習回数について、郵送により調査を行った。

(3) 分析方法：はじめに全体の傾向を把握するために単純集計を行った。次に、柔道開始年齢、動機、目標や練習状況とそれに対する意識を検討するため、項目ごとにクロス集計を行った。

3. 結果と考察

1) 柔道を始めた年齢、動機について

柔道を始めた年齢（図1参照、以下同様）は、6歳（13%）から11歳（11%）に分布している。特に8歳（17%）、9歳（15%）、10歳（18%）が多い。ある程度、体が成長し体力がついてから始めさせたいという親の考えや、子ども自身の興味や関心から開始時期が決まるものと推察される。また、この結果を見ると、受け入れ側は年齢制限を行っていないことが予想される。実際、少年大会では幼年・低学年の試合も参加人数が多く、活発に行われている。

柔道を始めた動機（図2）は、「家族などの薦め」（33%）、「親・兄弟がやっていた」（22%）など、身内の影響を受けて始める子どもが多い傾向にある。

柔道を始めた年齢と動機との関連を見ると、どの年齢層も親兄弟の影響を受けて始める子どもが多いが、特に3歳（100%）、4歳（67%）、5歳（67%）の低年齢層でその割合が高い。低年齢からスポーツを始める場合は、親などの影響が大きいといえる。

柔道を始めた年齢と目標との関連では、6歳以下から競技を始めた子どもの方が、7歳以上からの場合より「世界大会や全国大会への出場」を目標にあげる割合が高い（6歳以下38%、7

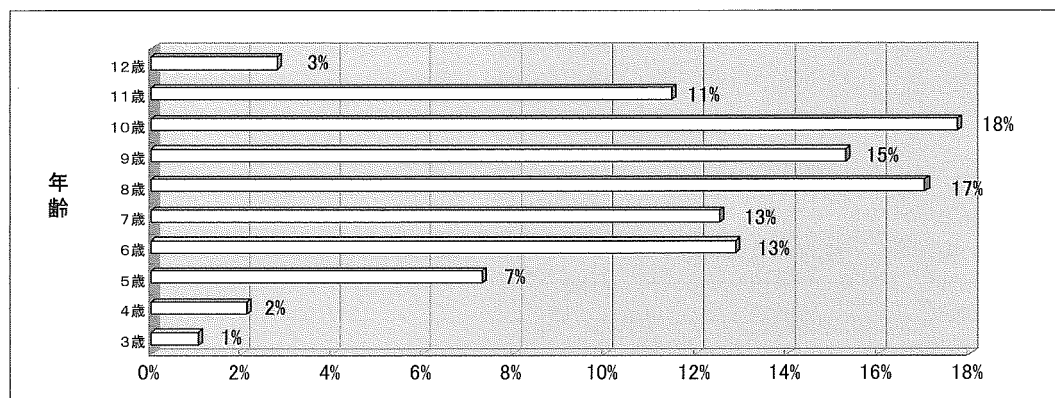


図1 柔道を始めた年齢

Fig.1 Judo starting age

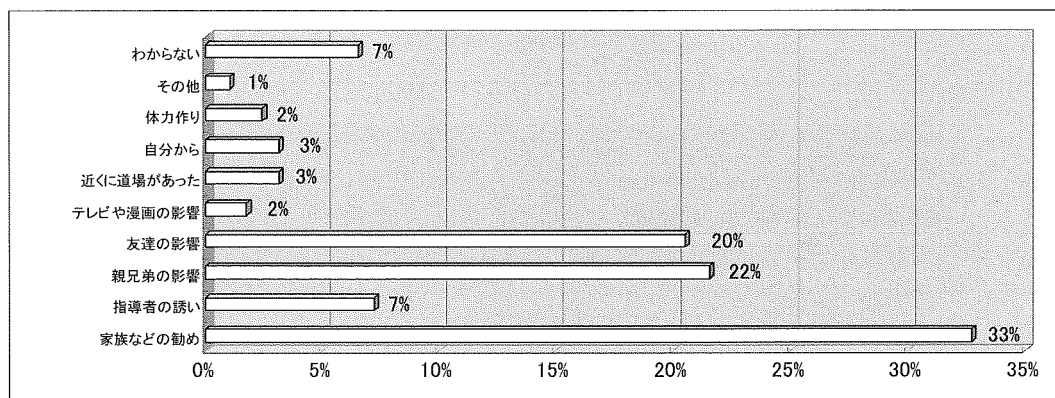


図2 柔道を始めた動機

Fig.2 How student were introduced to Judo

歳以上19%)ことから、低年齢から競技を始めた子どもの方が競技志向が強い傾向にあるといえる。

柔道を始めた動機と現在の目標との関連性はほとんど見られず、その後の練習環境や、性格、適性などによって競技志向や遊び志向に分岐していくものと思われる。

2) 柔道の練習回数や時間について

練習に参加している回数(図3)は、週に3回(53%)が圧倒的に多く、2回(18%)が続いている。団体が実施する練習回数(図4)にはほぼ等しいが、中には週に5回以上と回答している子ども(12%)がいる。これは、通常の練習日に加えて、休日の強化練習を行っていたり、2つの組織の練習にまたがって参加しているなどが考えられる。

練習への参加回数とそれに対する子どもたちの意識を照らし合わせると、練習が週に5回以上になると、「多い」と感じている子ども(54%)が多く、逆に週に1回では「少ない」と感じている子ども(43%)が多い。「ちょうどよい」と回答した子どもが最も多かったのは、週に2回(68%)であり、週に2~4回の練習回数が妥当であると思われる。

また、団体が実施する練習日のすべてに参加している子ども(74%)がほとんどであったが、練習日の一部に参加している子ども(26%)もいる。その理由(図5)は、第1位が「体調不良」(35%)で、第2位が「ほかの習い事がある」(29%)、第3位は「勉強や遊びの時間がなくなる」(22%)であった。柔道以外の習い事を行っている子ども(62%)も多く、それらとの兼ね合い

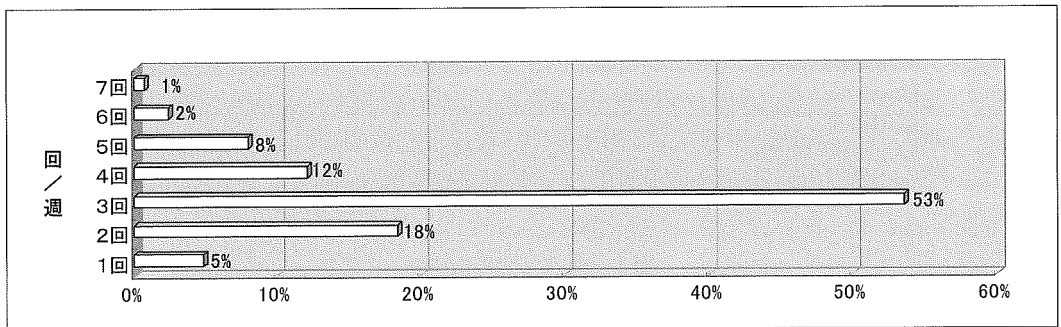


図3 練習参加回数(回/週)

Fig.3 Training frequency

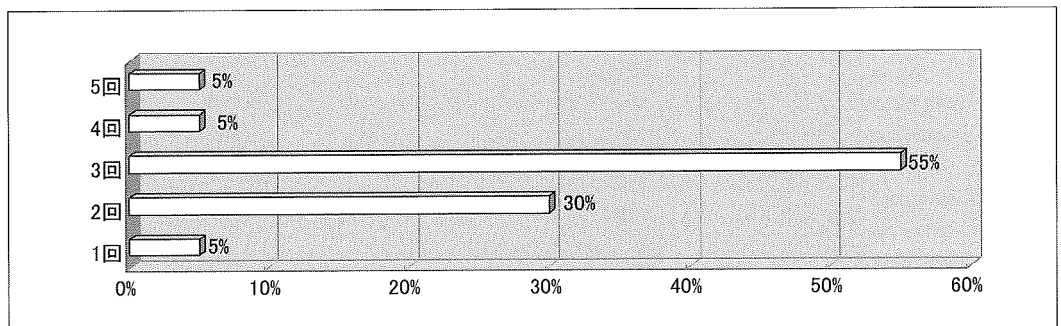


図4 平均練習実施回数(回/週)

Fig.4 Average training frequency

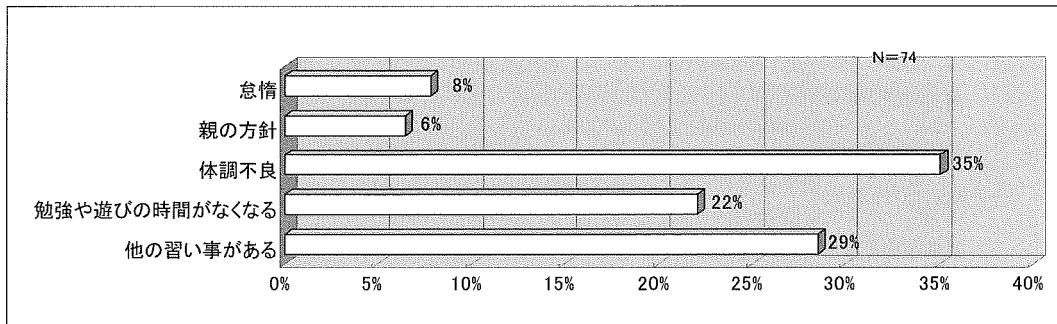


図5 一部参加の理由
Fig.5 Reasons for doing Judo

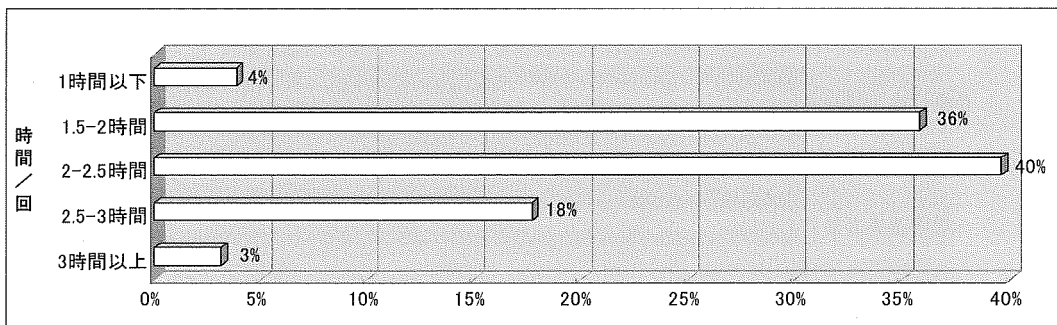


図6 1回あたりの練習時間
Fig.6 Length of training sessions

や遊びや勉強の時間の確保などを考慮する必要もあるため、練習回数は週に3回前後に設定するのが妥当であろう。

1回の練習時間(図6)は、1.5～2.5時間が計76%を占める。1回の練習時間とそれに対する子どもたちの意識を照らし合わせると、1.5～2.5時間に対して「ちょうど良い」と回答した子ども(71%)が最も多い。2.5時間を超える練習時間に対しては「長い」と感じている子どもが増加(50%)し、逆に1時間以下の練習時間に対しては「短い」と感じている子どもが増加(27%)する。1回の練習時間は、身体活動量が十分であり、また、次の練習への意欲(余力)を残すことが大切である。子どもの体力や集中力を考慮すると1回の練習時間はやや短めが良いと考えられ、2時間前後に設定するのが妥当であろう。

3) 練習環境について

練習場の広さについては、指導者への調査であるが、畳は平均98.5枚、40枚程度から200枚程度までばらつきがあった。体育館や、警察署など公共の施設を借りて練習を行っている場合と、個人の道場などでは条件が異なり、後者では小規模にならざるを得ないのが現状であろう。

子どもたちの意識は、「広い」「ちょうど良い」と感じているのは全体の65%で、残りの35%は「少し狭い」「とても狭い」と感じていた。道場の広さは、畳の枚数だけでなく、一度に練習する人数との兼ね合いが大切である。一般的には、正式試合場1面分の128枚を確保すること

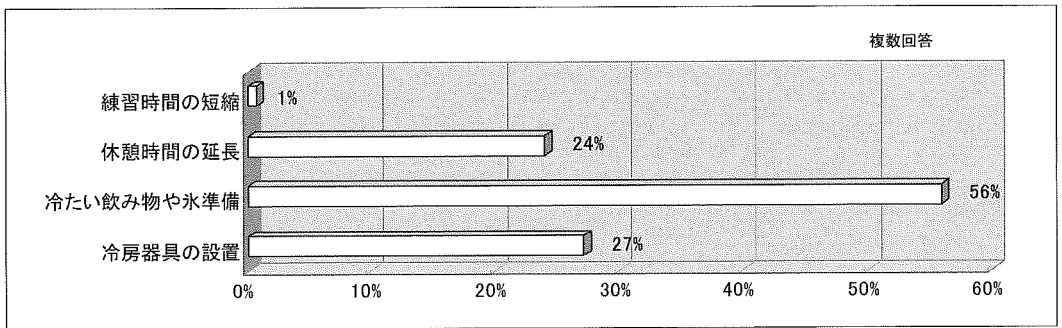


図7 夏季練習時の措置
Fig.7 Summer training preparations

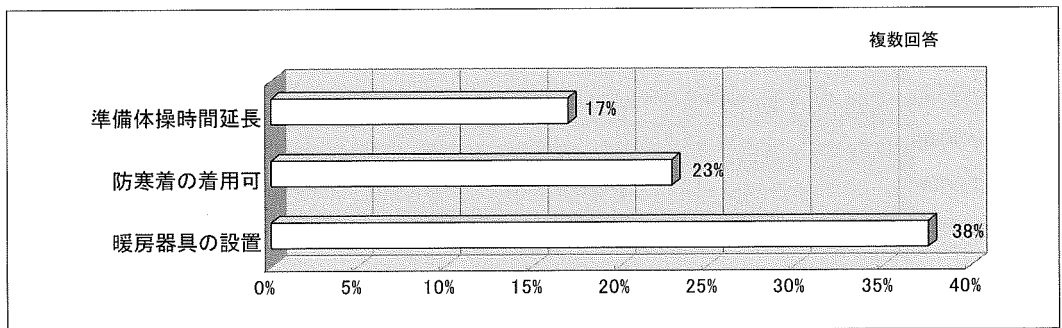


図8 冬季練習時の措置
Fig.8 Winter training preparations

ができれば、試合練習や形の練習も正しい規格で行うことができ、理想的といえる。

なお、練習中の配慮(図7、8)には、夏季には冷たい物を準備(56%)したり、冷房器具が設置(27%)されたり、冬季には暖房器具が設置(38%)されたり、何らかの配慮がなされている。練習中の水分補給については、ほとんどの子どもは「水分補給が可能である」(95%)と回答しているが、ごく一部の子どもは「水分補給ができない」(5%)と答えている。身体的な安全面からも運動中の水分補給は必須であり、ごく少数の指導者とはいえ、危険性を認識しなければならない。

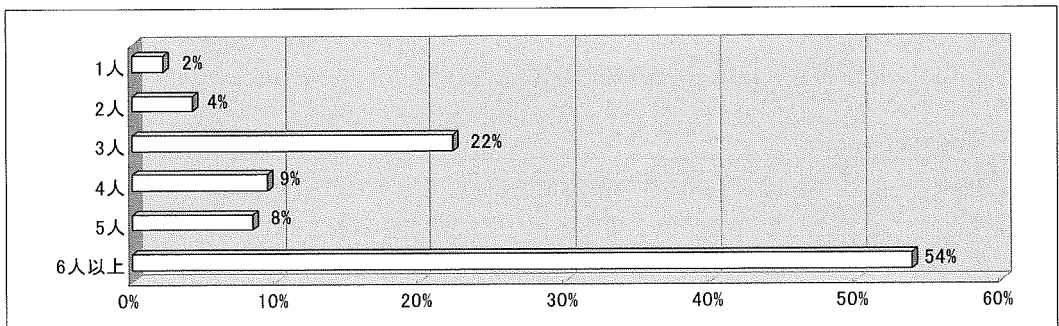


図9 指導者の人数
Fig.9 The number of coaches

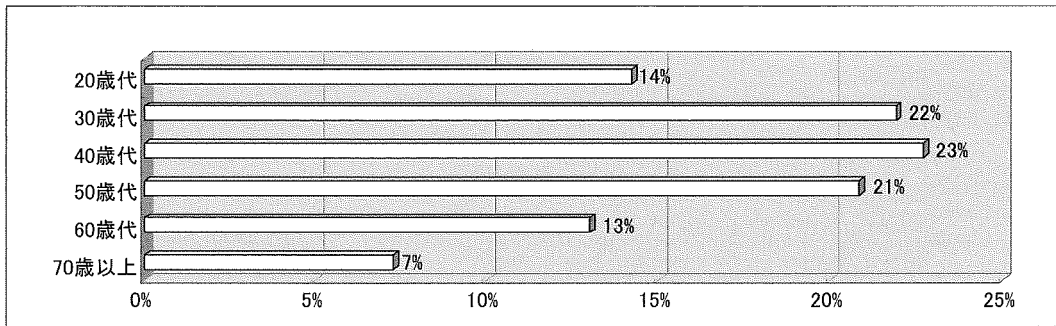


図10 指導者の年齢層

Fig.10 Coachs'age

指導者の人数(図9)は、6人以上(54%)が半数を占め、3人(22%)以上の複数による指導が中心である。特に6人以上の場合は、段階別の指導を展開したり、個に合った指導ができるなど、目が行き届いた指導が行われると考えられる。

指導者の年齢層(図10)は20歳代(14%)～70歳以上(7%)まで幅広く分布している。指導者の中に女性が含まれるかについては、「女性がいる」と回答したのは全体の38%であった。指導者の性別に対する子どもたちの意識をみると、女子の56%は「女性指導者がいて欲しい」と回答している。男子も15%は「女性指導者がいて欲しい」と回答しており、今後さらに少年柔道の現場に女性が進出することが求められている。直接、柔道指導に携われなくとも、子ども(特に女子)の相談相手や世話係などとして女性が指導の現場にいることも必要であるといえる。

4) 練習内容について

好きな練習種目(図11)は、「投げると嬉しい」「技をたくさんかけることができる」などの理由から、「乱取(立技)」に集中(33%)し、投げたり投げられたりするという柔道の醍醐味を味わいたいと感じている子どもが多いことがわかる。一方で、特に好きな練習はない子ども(26%)もあり、練習を工夫する必要があるといえる。

嫌いな練習種目(図12)は、「つらい」「痛い」などの理由から「補強運動」(11%)や「投込」(9%)があげられているが、全体的に少ない傾向であった。どの練習も特に偏ることなく指導されている結果といえるだろう。地味な練習である補強運動や投込では、遊びの要素を取り入れ

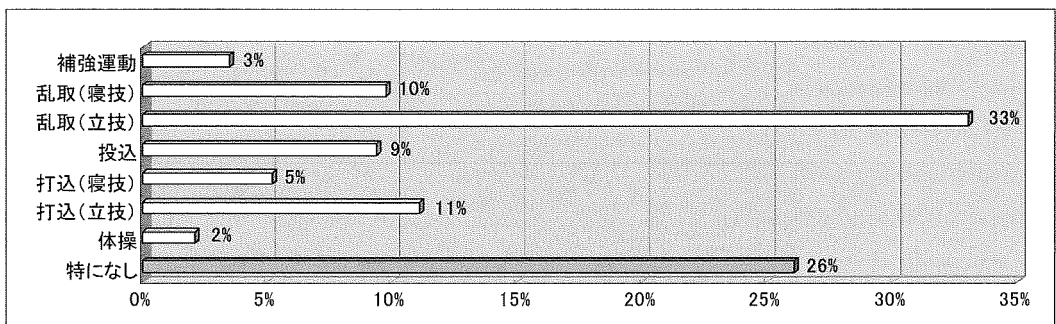


図11 好きな練習種目

Fig.11 Students'favorite style of training

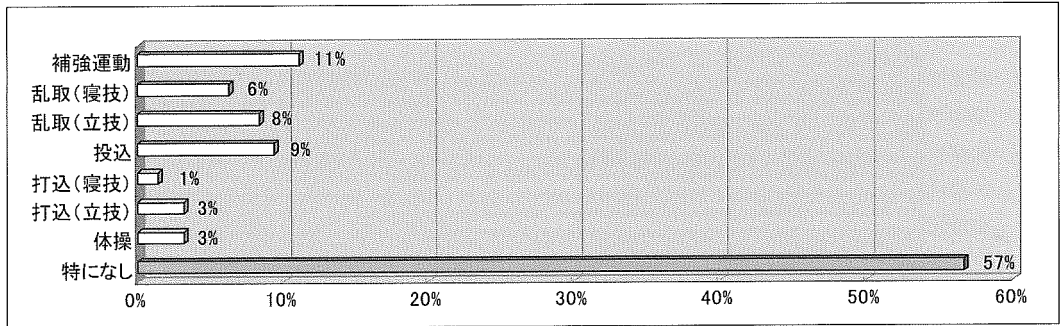


図12 嫌いな練習種目

Fig.12 Students'least style of training

たり、マットなどを用いて痛みを軽減させる工夫も大切である。

合同練習(図13)は、1回から4回(61%)と5回から9回(22%)が大多数を占め、それに対する子どもたちの意識(図14)は、「色々な人と練習できて楽しい」(60%)や「合同練習は楽しみだ」(43%)など肯定的な感想が多く、日常と異なる体験ができることへの期待感が強いと考えられる。このように、閉鎖的な環境ではなく外部との交流を図ることは子どもの成長過程において大切なことであると考えられる。しかし、中には「普段の練習より辛い」(28%)「移動が大変」(12%)「回数が多い」(15%)と感じている子どもたちもいるので、体力的・精神的負

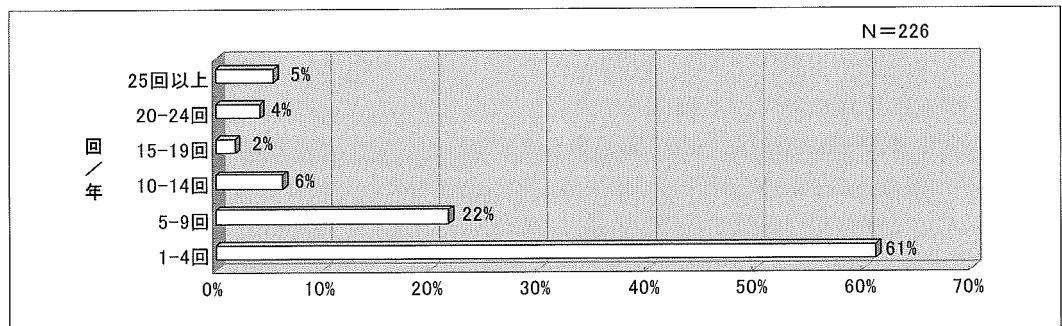


図13 合同練習の回数(年間)

Fig.13 Frequency of combined exercises

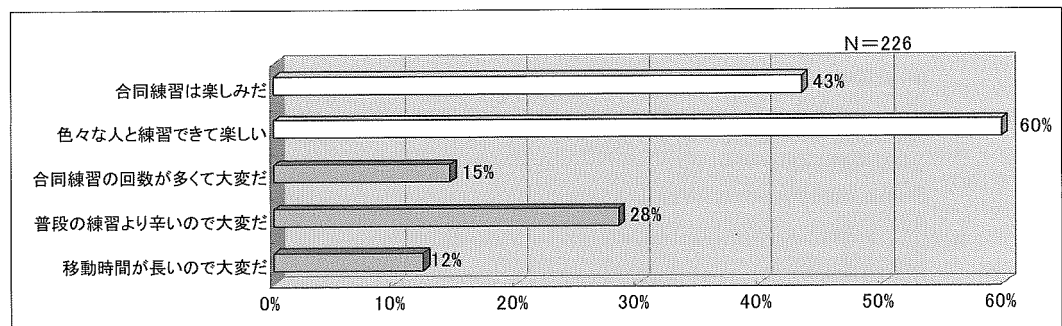


図14 合同練習に対する意識

Fig.14 Students'motivation to combined exercises

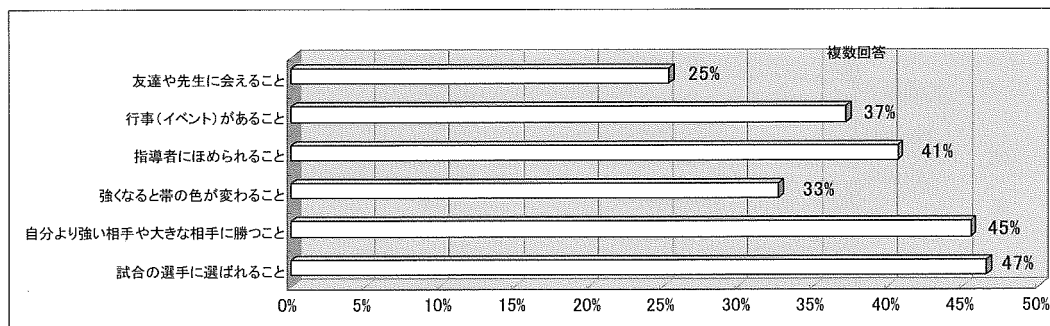


図15 練習を続ける中の励みや楽しみ
Fig.15 Fun of students in continuing training

担を考慮する必要もある。

合宿(図省略)は、年に1回、1泊2日で行われるのがほとんど(88%)であり、年中行事として恒例的に行われているようである。合宿では、練習以外にも様々なイベントを設定しているところが多く、ほとんどの子どもたちは「合宿は楽しみだ」(79%)「いつもと違う体験ができてよい」(77%)と合宿を歓迎している。

練習の中での楽しみや励み(図15)は、「試合の選手に選ばれること」(47%)「自分より強い相手や大きな相手に勝つこと」(45%)であり、常に試合や勝負を意識していることがわかる。また、「指導者にほめられること」(41%)も多く、子どもたちにとってほめられることは楽しみであり、練習意欲を高めることにつながるであろう。加えて、「強くなると帯の色が変わること」(33%)「行事やイベントがあること」(37%)など、独自の工夫もみられる。

練習の中で嫌なこと(図16)は、「体格の違う相手と練習しなければならない」(26%)「指導者に怒られること」(26%)「親に怒られること」(20%)などがあげられているが、全体的には少ない傾向にあった。「柔能く剛を制す」が柔道の基本理念であるが、体格の小さな子どもや女子にとっては、自分より大きな相手や力の強い相手と練習することを「嫌だ」と感じるようである。指導者に怒られることは、誰でも嫌だと感じるであろうが、行き過ぎた体罰等があればそれは問題である。さらに、熱心な親が増え支援してくれるのは良いことだが、練習への過度の介入や、必要以上の期待などは子どものやる気を殺いでしまうことになりかねない。

また、柔道の練習の他にランニングや筋力トレーニングを「行っている」(38%)子どもがい

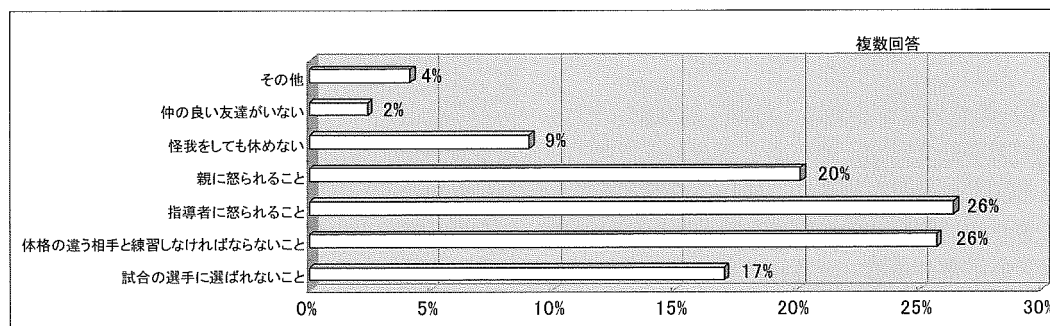


図16 練習を続ける中で嫌なこと
Fig.16 Loathing of students in continuing training

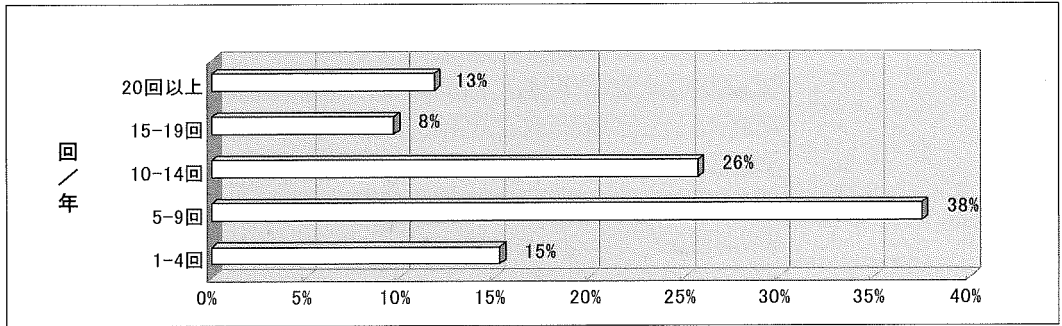


図17 試合出場回数 (年間)

Fig.17 Annual frequency of competition participation

る。組織の練習の一環として行っている子どももいれば、独自に自宅などでトレーニングを行っている子どももいる。

その他では、柔道の練習以外に、宿題など勉強をするための時間を設けているところ (22%) があった。文武両道の精神を尊重しているといえる。

5) 試合への参加状況について

試合への参加 (図17) は、1年間に5~9回 (38%) と1年間に10~14回 (26%) とで半数以上を占めており、平均して換算すると、1カ月に1回程度から2カ月に1回程度試合に参加している場合が多い。子どもの体力的・精神的負担や目標・練習意欲という視点から考えれば妥当な回数といえる。1年間に20回以上 (平均して1カ月に1.5回以上試合がある) では、子どもへの負担が大きいと考えられる。また、子どもの大半が、「試合での勝利」を楽しみにしていることから、試合への参加が年に1回程度では、物足りなさを感じるであろう。

試合への参加に対する子どもの意識 (図省略) は、回数が「ちょうど良い」と感じている子どもが最も多いのは、1年間に5~9回 (69%) であり、次いで10~14回 (68%) であった。試合への参加が1カ月に1回程度か2カ月に1回程度に対して、「ちょうど良い」と感じている子どもが多いことがわかる。1年間に15回以上になると、「多い」と感じている子ども (36%) が増加し、特に20回以上では約半数の子ども (47%) が「多い」と感じている。逆に、1年間に4回以下になると「少ない」と感じている子ども (36%) が多い。移動や緊張など体力的・精神的負担と、目標や課題克服など練習への動機付けという点を考慮し、試合への参加回数は1カ月に1回から2カ月に1回程度が妥当であると考えられる。

6) 柔道に対する意識・目標・興味関心について

柔道をしていてよかったと思うこと (図18) は、「試合での勝利」 (73%) が圧倒的に多い。ほとんどの子どもたちは、試合で勝利することを楽しさを見出していることが分かる。勝ち負けを争うのは格闘技の本質であり妥当な結果ともいえるが、競技志向が強くなりすぎないように配慮する必要もある。2番目に多いのは「友達が増えた」 (51%) であり、柔道を通じての交流関係の広がりを楽しさを見出す場合も多い。特に、異年齢の集団であることから縦の繋がり、横の繋がり、指導者との繋がりなど幅広い人間関係を経験することになり、柔道の競技力のみにとどまらず、人間形成のうえで大きなプラスの影響を与えることは間違いない。3番目以降としては、

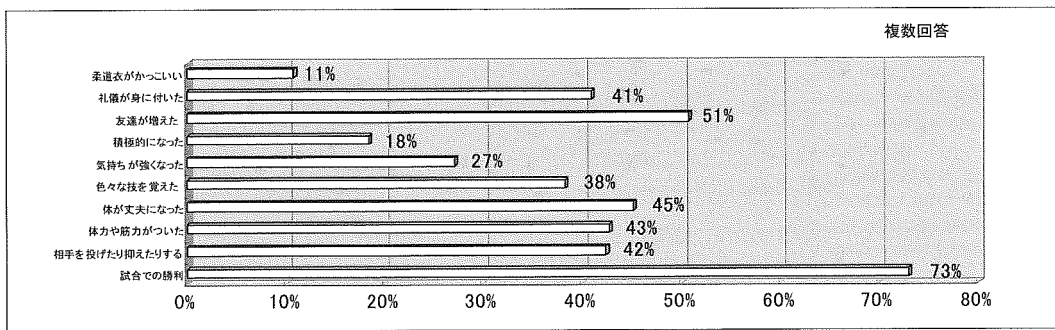


図18 柔道をしていて良かったこと
Fig.18 Benefits of practicing Judo

「体が丈夫になった」(45%)、「体力や筋力がついた」(43%)といった身体的な成長や、「相手を投げたり抑え込んだりする」(42%)、「いろいろな技を覚えられた」(38%)といった柔道そのものの競技性を楽しみを見出していることもわかる。また、「礼儀が身に付いた」(41%)ことが良かったと回答する子どもも多く、柔道の礼儀を重んじる精神が生かされ、伝わっていることがわかる。

柔道をしていて嫌だと思うこと(図19)は、「試合での敗北」(61%)が多く、前述の「試合での勝利」に楽しさを見出すのと逆のケースであるが、試合の結果にウエイトがかかっていることが推察される。次に多いのは、「相手に投げられたり抑え込まれたりする」(33%)、「痛い思いやけがをする」(30%)で、投げられることへの恐怖心や痛い思いをしたくないという気持ちが表れている。4番目以降としては、「練習がづらい」(26%)「練習で怒られる」(20%)などで柔道に限らずどの競技にも共通することであると思われる。しかし柔道は、日本の伝統的武道であるという考え方から、極端な精神論のもとで指導が行われる可能性も考えられる。今日、スポーツとしての柔道が広まりつつある中で、伝統的な精神を重んじる部分と、スポーツとしての楽しさを融合させて柔軟に指導していくことも求められる。また、勉強時間が足りない(10%)や遊びの時間が足りない(16%)だけでなく、睡眠時間が足りない(14%)と答える子どももおり、考慮を要することがあることもわかった。

今後の目標(図20)については、「試合で1回でも多く勝つこと」(52%)が最も多く、次いで「世界大会や全国大会への出場」(39%)が多い。大会の規模はともかく、試合での勝利を目

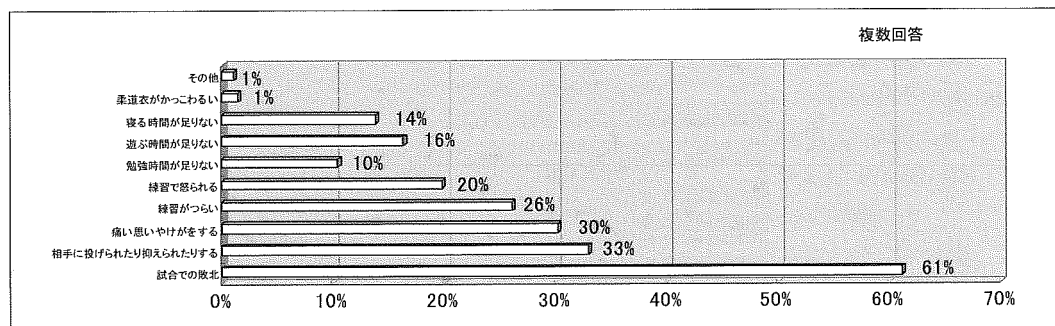


図19 柔道をしていて嫌なこと
Fig.19 Disbenefits of practicing Judo

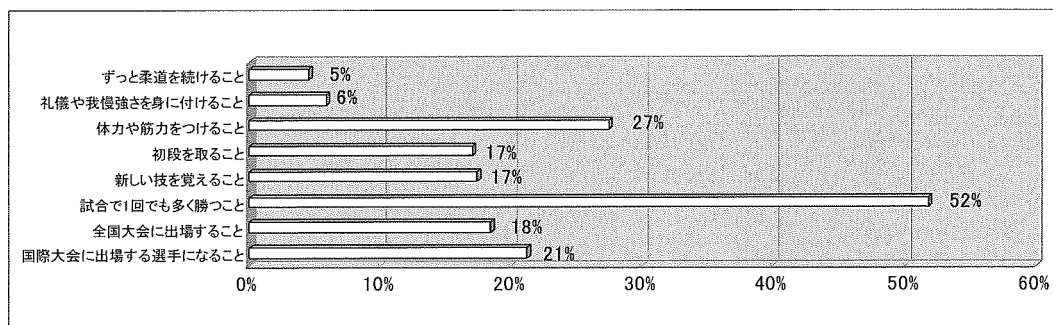


図20 柔道の目標
Fig.20 Aim of practicing Judo

標にしていることがわかる。3番目以降としては、「体力や筋力をつけること」(27%)「段(黒帯)を取得すること」(17%)があげられている。段の取得を目標にあげる子どもが少ないが、柔道を継続していると当然のこととして有段者になれるため、目標にはなっていないのだと思われる。「新しい技を覚えること」(17%)「礼儀や我慢強さを身に付けること」(6%)「ずっと柔道が続けること」(5%)はいずれも少なく、子どもの目標の大半は試合での勝利にあることがわかる。試合での勝利は明確で目標にしやすいが、生涯スポーツとしての柔道を考えるとき、新しい技の習得や追及をする柔道の持つ面白さを伝えていくことも大切だと思われる。

柔道の試合の観戦(図省略)は、「よくする」(42%)「時々する」(37%)が多く、ほとんどの子どもたちはテレビなどで柔道の試合を観戦するという。オリンピックや世界選手権など大きな大会の際しかテレビ放送されることのない柔道であるが、子どもたちの関心は高いようである。柔道の試合観戦を「よくする」「時々する」と答えた子どもの94%が「目標にする選手がいる」と回答しており、大舞台上で活躍する選手の姿は子どもにより影響を与えていることがわかる。今後さらに、テレビ中継等が増えていくことが望まれる。

最後に、現在の小学生が、今後は柔道を「続けない」と回答した子どもが25%いた。その理由(図21)は、「他にやりたいことがある」(48%)が第1位であるが、「柔道が特に好きではない」(35%)が第2位となっており考えさせられる結果である。親や周囲の期待で柔道を開始したものの好きになれない場合が多いと考えられるが、偏った指導の影響で柔道への興味・意欲が失わ

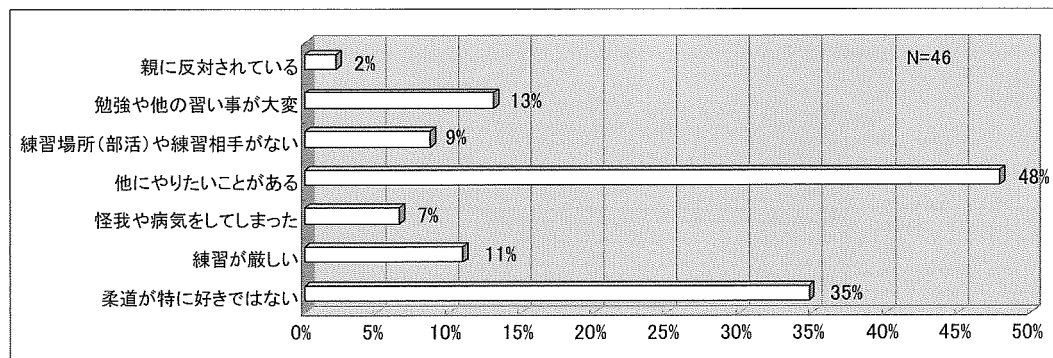


図21 今後柔道を継続しないと思う理由(小学生のみ)
Fig.21 Reasons for stopping Judo

れているとすれば問題である。

7) 柔道以外の習い事の実施状況について

運動かそうでないかに関わらず、何らかの習い事(図省略)を行っている子ども(62%)が多い。全体の傾向としては、運動の習い事を行っている子ども(26%)より、運動以外の習い事を行っている子ども(49%)の方が多。習い事の回数は、週に1回から2.5回(85%)が最も多。柔道の練習との兼ね合いを考えれば妥当な回数であろう。しかし中には、週に5回以上と回答している子どももみられ、過密スケジュールの可能性がある。

1日あたりの時間は、運動の習い事、運動以外の習い事のいずれも1.5時間以内(67%)が多く、3時間以上(15%)は少ない。しかし、野球やサッカーなどの球技種目では、1日に4時間から5時間に及ぶ場合もある。1日に2種目の運動を習い事としている場合、子どもの負担は相当大きいことが推測され、オーバートレーニングや疲労の蓄積の心配もある。一つの競技だけでなく様々な競技を経験することは、心身の発達や巧緻性を高め、柔道の競技力向上にも好影響を与えらると思われるが、過重な負担にならない様に回数や時間を十分考慮する必要がある。

習い事の内容は、運動の習い事では水泳(51%)が半数以上を占め、健康や安全を志向して行われていることがうかがわれる。また、サッカー(17%)や野球(16%)はいずれも少ないことがわかった。運動以外では、塾(23%)ピアノ(28%)書道(25%)に分散しており、最近の世間の動向を反映して英語(15%)に通う子どもも見られる。

柔道以外の習い事の実施状況と、柔道の練習への参加状況との関連を見ると、柔道以外の習い事の回数が増えると柔道への参加回数が減るとは一概にはいえないが、柔道以外の習い事の回数が週に4日以上になると、柔道の練習日には一部しか参加しない子どもが増加する傾向にあることがわかった。この年代の子どもや親にとって柔道も習い事の一つとして認識され、意欲的な子どもや親は柔道にもその他の習い事にも積極的に参加しているのだと推測される。

4. まとめ

本研究では、柔道を行っている小学生に焦点を当て、柔道を始めた年齢やきっかけ、柔道の練習状況、練習環境、柔道や練習に対する意識などについて質問紙を用いて調査を行った。その結果、次のようなことがいえる。

1) 柔道を始めた年齢と動機について

- ・柔道開始年齢は、3～12歳に広く分布しており、6歳(13%)、7歳(13%)、8歳(17%)、9歳(15%)、10歳(18%)、11歳(11%)が中心となっていた。
- ・柔道を始めた動機は「家族などの勧め」(33%)「親・兄弟がやっていた」(22%)など近親者の影響が最も多かった。

2) 柔道の練習状況や環境、試合への参加状況について

- ・練習回数は週に2回と3回が80%以上を占める。1回の練習時間は、1.5～2時間未満と2～2.5時間未満が合わせて70%以上である。これらに対する意識は、練習回数は週に2回と3回、練習時間は1回1.5～2.5時間に対し「ちょうどよい」と感じている子どもが最も多かった。
- ・練習場所は、町の道場、市民体育館などの柔道場、学校の道場であり、広さの平均は畳98.5枚であった。練習場所の広さに対しては、65%の子どもが「広い」「ちょうどよい」

と感じており、残りの35%は「狭い」と感じている。

- ・指導者数は6人以上が54%と最も多く、1人や2人は少ない。集団で指導されていることがわかる。また、女性の指導者がいるところが全体の38%あり、アテネ五輪の成績を見るまでもなく女子柔道の隆盛を反映しているものと思われる。
- ・試合への参加回数は、1年間に5～14回が64%と最も多く、それに対する意識も1年間の試合参加回数5～14回に対して「ちょうどよい」と感じている子どもが最も多かった。

3) 練習内容について

- ・好きな練習種目は、「乱取（立技）」が33%で最も多く、柔道の醍醐味を味わいたいと感じている子どもが多いことがわかる。一方で、「特に好きな練習はない」という子どもが26%いる。嫌いな練習種目は全体的に少ないが、「投込」「補強運動」などがあげられた。練習内容や練習の仕方を工夫する必要があるといえる。
- ・練習の中での楽しみや励みは、「試合の選手に選ばれること」（47%）「自分より強い相手や大きな相手に勝つこと」（45%）が多く、通常の練習の中でも勝負に意識が集まっていることがわかる。また、「強くなると帯の色が変わること」（33%）なども多く、動機付けの工夫もされていることがわかる。
- ・練習の中で嫌なことは、「体格の違う相手と練習しなければならない」（26%）「指導者や親に怒られる」（23%）などがあげられていた。

4) 柔道に対する意識・今後の目標について

- ・柔道をしていてよかったことは「試合での勝利」（73%）が圧倒的に多く、試合での勝利に楽しさを見出していることがわかる。「相手を投げたり抑え込んだりする」（42%）「体が丈夫になった」（45%）など、柔道の競技力や体力の向上を評価するとともに、「友達が増えた」（51%）「礼儀が身についた」（41%）など精神面での充実をよかったと感じる子どもも多い。
- ・柔道をしていて嫌なことでは、「試合での敗北」（61%）が多数を占め、試合の結果にウエイトがおかれていることがわかる。
- ・今後の目標は、「試合で1回でも多く勝つ」（52%）と「世界大会や全国大会への出場」（39%）が多い。「新しい技を覚えること」（17%）「ずっと柔道続けること」（5%）などはいずれも少ない。生涯スポーツとしての柔道を考えると、試合の結果だけではなく、新しい技術の習得や柔道そのものの持つ面白さや、自分に挑戦することの大切さなどを伝えていけるような指導が求められるであろう。
- ・現在の小学生における柔道継続の希望については、25%の子どもが今後（小学校卒業後）柔道が続けないと回答している。その理由は「他にやりたいことがある」（48%）が最も多かったが、「柔道が特に好きではない」（35%）が次に多く、考えなければならない点である。

参考文献

- 1) 尾形敬史他（1984）：少年柔道の実態調査．講道館柔道科学研究会紀要第IV（1984）, 65-73
- 2) 増井節郎（1992）：少年柔道の実態調査三重県について．皇學館大学紀要30（1992）, 73-85